

---

# 沈黙の勇者SEAGAL

HA YA O

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

沈黙の勇者SEAGAL

### 【Nコード】

N1821M

### 【作者名】

HAYAO

### 【あらすじ】

RIDER WORLDの吸収合体に成功した秘密結社BIG SHOCKERの大首領は全ての神を超越するため更なる世界の吸収を始めた。

多くの世界を吸収し世界が混沌に包まれたころ、一人の勇者が現れた！

究極無敵銀河最強沈黙男セガールが悪も善も全てをぶっ飛ばす！  
キッチンでも陸でも海でも宇宙でも負けたことは無いんだ！

セガールの対戦相手随時募集中

## 沈黙の序章（前書き）

悪乗りパロディ・コメディ小説です。  
お嫌いな方は閲覧をお控えください。

## 沈黙の序章

？．

存在の始まりとは何だろう。

最初の神でさえ『有』より前の『無』を知ることはない。

『無』は『混沌』を生み出し、『混沌』が『秩序』を生んだ。

秩序は最初ひとつであったが、秩序の中にまた混沌が生まれた。秩序は混沌を吐き出し、混沌は更に秩序を生み出した。

この原初の『細胞分裂』は、いつしか『知識』を生み出した。それが世界を創造した母なる神、『ソフィア』だった。

ソフィアは最初の創造に失敗した。

最初の世界は生命（無機物も含む）の循環のみでできていた。世界はすぐに滅びた。

循環のみでは、ほんの些細なイレギュラーでさえ致命的だった。

ソフィアは次に生命に自分自身である『知識』を与えた。

知識は進化を生み出した。

進化した知的生命体はいつしか『神』の存在を知り、それが『信仰』となった。

世界は完璧に思われた。

しかし、知的生命体は『信仰』を疎かにするようになった。それに比例するかのように、神自身の存在が消えはじめた。

ソフィアは世界を滅ぼした。

三度目にソフィアは多くの神を生み出した。

ソフィアは信仰による自身の消滅がおこらぬよう、子の神々には自身やそれぞれの神の存在が認識できないようにした。

子の神はそれぞれが世界を作り、それぞれが我こそが絶対神と思っていた。

大海を知らぬ神『デミウルゴス』の誕生であつた。

デミウルゴスのおさめる世界でもやはり信仰による神の衰退が起つた。

そして、すべての世界が滅びの兆しを見せた頃、ひとつのデミウルゴスは己の存在に疑問をもつた。

「己とは何か、どこから来てどこにいくのか。」

そのデミウルゴスの疑問は知識を智慧『グノーシス』へと進化させた。

グノーシスを得たデミウルゴスは一つの答えにたどり着いた。

「世界は一つではない、世界を一つにすれば自身が滅びることはない」

なぜそう思ったかはわからない。

しかし、それはグノーシスの導きだした確信だった。

デミウルゴスは自分の世界で最も知識を持った生命である人間の下へ姿を現した。

デミウルゴスは人間の欲、つまり『悪』につけこんだ。

何万という人間がデミウルゴスの下に集い、世界的一大組織を作り上げた。

秘密結社『SHOCKER』の誕生だった。

人はデミウルゴスを大首領と呼んだ……

？

『SHOCKER』の目的は人々の恐怖心を煽り、神への信仰を復活させることだった。

恐怖し絶望した者が最後に頼るのは神の存在である。

しかし、予期せぬ事態が起こった。

神である大首領の確信が世界の意志となったのか、世界の統合が始まってしまったのである。

今の大首領には、他のデミウルゴスを吸収し、統合された世界を維持するだけの力は無かった。

もはや、信仰心を高めるだけでは不十分だった。

大首領はかつての力を、いや、それ以上の力を得る必要があった。そのため、器が必要だった。

「世界の統合に耐えうるだけの器……」

『SHOCKER』は『改造人間計画』を開始した。

改造人間計画は思わぬ成果を見せた。

それはごく単純な合成改造を行っただけの初期の改造人間だったが、脳の強化改造を受けずにその肉体を操作し、さらにほぼ無機物と化した肉体にもかかわらず『成長』を見せたのである。

『RIDER』

そう呼ばれ『SHOCKER』へ反旗を翻した彼に大首領は『可能性』を見いだした。

RIDERは孤独な戦士だった。

完全に残された感情ゆえに苦しみ、痛みを分かち合う者を求めた。

そして彼は、第二、第三の悲しい男を自らの手で生み出してしまう。

大首領にとってそれはうれしい誤算だった。

大首領は十数年をかけ間接的に多くのRIDERを生み出し、多くの改造人間をRIDERと戦わせた。

RIDER達は戦ったびに成長した。

時は経ち『SHOCKER』が『BADAN』と名を変えたころ、大首領は己の器とする男を決定した。

『ZX』

終わりを示すアルファベットを名に持つ彼はズイクロスと呼ばれた。最後の男にふさわしい名前だった……

？

ズイクロスは『BADAN』を崩壊させ、大首領を倒した。

それは大首領の筋書通りだった。

倒されたと見えた大首領はズイクロスと融合し、その魂のなかへ身を潜めた。

もはや、自分の世界で可能性を見いだす必要はないと考えた。

ズイクロスに潜みつつ大首領が考えたのは、異世界への干渉による

可能性の発見だった。

グノーシスに目覚めた大首領にとって異世界への干渉は間接的であれば不可能なことではなかった。

大首領は隣在するいくつかの異世界『パラレルワールド』にRIDERの因子を送り込んだ。

それはさらなる可能性の発見の連続だった。

ある世界ではデミウルゴスが創世王と名乗るRIDERとなり、ある世界では時を支配したデミウルゴスが十を超えるRIDERを生み出し、戦わせた。

そんな中、ある世界が生み出した可能性は大首領の計画を大きく加速させた。

『D-LINER』

それは時空を支配し、あらゆる世界を行き来できる力を持つ電車を模した形状の乗り物だった。

D-LINERが大首領の世界を通過した際、大首領はその力の一部を我がものとすることに成功した。

大首領はついに各世界に直接的に干渉する能力を得た。

大首領はパラレルワールドを飛びかい、最強の可能性を見て回った。そして自分の世界へと戻った大首領は新たな組織『BIG SICKER』を組織し、持ち帰った情報をもとに完全なる支配者となるための神具をつくりあげた。

『DECA DRIVER』

それは、全てを吸収し我がものとする装置。

神具DECADRIIVERを身につけた大首領はついに全てのRI  
DERの能力を手にし、それぞれの世界の神、デミウルゴスをも吸  
収した。

デミウルゴスを吸収された世界は崩壊し、大首領の世界とひとつに  
なった。

「世界の延命は成された・・・」

しかし、延命された世界もいつかは滅びるだろう。

「己（神）を超越し真理へと至るには・・・」

大首領率いる『BIG SHOCKER』の野望は、まだ見ぬパラ  
レルワールドへと向けられた……

t o b e c o n t i n u e d .

## 沈黙の序章（後書き）

予告・『BIG SHOCKER』の名前が忘却のかなたへと消えた時代、人類は宇宙へと生活圏を広げていた。全宇宙を巻き込んだ宇宙戦争から数十年、終戦記念日その日、宇宙は再び暗黒の時代を迎えようとしていた。立ち向かうは一人のコック？次回・沈黙の勇者SEAGAL・・・沈黙のデススター「無重力で負けたことはないんだ。」

## 沈黙のデススター（前書き）

悪乗りパロディコメディ小説です。  
お嫌いな方、ブラックジョークに不快感を覚える方は閲覧をお控え  
ください。

## 沈黙のデススター

？．

RIDERと呼ばれる戦士たちの人知を超えた戦いが終わり、人々がBIG SHOCKERという名を忘れて久しい時代・・・

科学は発達し、生物も進化し、世界はまさに混沌の時代を向かえていた。

増えすぎた人間と新人類（動植物の進化した人類）は宇宙へと進出し、宇宙にはいくつもの人工惑星が点在していた。

その中のひとつ、地球から最も遠く離れた人工惑星は「DEATH STAR（死の星）」と呼ばれ、忌み嫌われる惑星となっていた。DEATH STARはもともと「FAR STAR（遠い星）」と呼ばれていた。

ある日FAR STARで新種の病が蔓延した。科学者たちは研究を進め特效薬の開発に成功したが、物資が足りなかった。

FAR STARの代表者たちは近隣の人工惑星をや地球に物資の補給を打診したが、それが届けられることは無かった。

FAR STARは人工の約半数を病で失った。

それから数十年後、FAR STARはDEATH STARと名乗り、地球と全ての人工惑星に宣戦布告した。

DEATH STARの宣戦布告から12時間後、ひとつの人工惑星が消滅した。

数十年の時を経て、人工惑星は戦闘要塞へと変貌を遂げていたのである。

この宇宙戦争は約三年間続いた後、地球、人工惑星側の降伏という

形で終戦した。

そして更に20年の時を経た終戦記念日の今日、地球、人工惑星側とDEATH STARとの間に恒久平和条約が交わされようとしていた。

DEATH STARの調印式会場には、各星の首脳陣が集められた。

会場には一台の長テーブルがおかれ、その上には純白のクロスが敷かれていた。

その様子は調印式会場というよりはパーティー会場のそれであつた。

？．

「いつから宇宙旅行なんてできるようになったんだ？」

オードヴルに出す予定の魚介のテリーヌを切り終えた黒髪の中年コック、ケーシー・ライバックはふと呟いた。

「いつって・・・ずっと前だろ？」

陽気そうな黒人コックのボブが答えた。

「・・・そうか・・・」

ケーシーにはわからなかった。

ある日ケーシーは寝室の窓から日食を見た。

太陽が暗黒に染まり、世界から光が奪われた数秒後、あたりは虹色に輝き歪み始めた。

「変な夢だな」

そう思ったケーシーは目を閉じ、いつしか眠ってしまった。

次にケーシーが目覚めたとき、世界には何も無かつた・・・いや、何もかもがあつたというべきかも知れない。

あらゆるものが混ざり合い、理解不能の形とも呼べない形を作り上げた世界。

自分以外の全てが混ざり合っていた。

どれくらい時間が過ぎたのであろう、あたりは突然黄金の輝きに包まれた。

まぶしさに目をつぶり、次に目を開いたとき、ケーシーの目の前に一人の女が立っていた。

女はあたりと同じ金色の服をまとい、同じく金色の長髪を後ろに流し額をあらわにし、黒のカチューシャを付け、年齢は五十代かと思われる風貌だった。

「あんたは？」

表情を変えずケーシーは尋ねた。

「あなた、本当にふしぎねえ………」

女は質問には答えず、ビブラートのかかった裏声のような声でそういった。

女は男だった。

「不思議なのはあんただ………」

「ふふ、あなたの偉大な魂があなた自身ををみちびくわ。」

ケーシーは夢の続きだと思った。

「人は私をみわさんと呼ぶわ………」

そう言い残してみわさんは消えた。

ケーシーは金色の世界の中で眠った。

三度目にケーシーが目覚めたとき、ケーシーは宇宙船にいた。

窓の外の景色と無重力とが宇宙であると確信させた。

「昨日まで宇宙旅行なんてSF世界の話だったが………」

しかし不思議なことに、今の自分にも違和感はないのだ。

「本当に不思議だな………」

ケーシーはみわさんの言葉を思い出していた。

「だよなあ…… DEATH STARと平和なんてなあ………」

「

ボブはケーシーの言葉にそう答えた。

？・

調印式に訪れた各星の首脳陣はあつけにとられていた。

会場に入り、全員が着席してすぐに食前酒が運ばれてきた。

「調印の前にまずは皆様との会食を・・・」

DEATH STAR星王シディアスはそう言って乾杯の音頭をとった。

会食が進み、食後のドリンクが運ばれたころ、シディアスは再び口を開いた。

「突然のことで驚かれたでしょうが、私はこの会食で皆様の信頼を見たかったのです。」

皆様が私を疑っているのであれば、誠に恐縮ではありますが、調印は行わないと決めていました。

しかし、ここにおいでくださった百余名の皆様は私を信頼してくれました。

私はコックを懐柔し、この料理に毒を盛ることもできた。

もちろん毒など入っておりませんが・・・皆様は黙って食事をし、早く調印せよとの言葉も聞かれなかった。

このような姑息な手段を用いた私をどうかお許しただきたい。

私の心は決まりました・・・これより一時間後、調印式を執り行いたいと思います。」

拍手喝采がおこった。

一時間後、調印式会場へ移動し、西洋風の装飾がなされた赤い扉を開いたシディアスの目の前に裸に黒の覆面とマントという風貌の男が現れた。

「ベイダー卿、君が・・・」

「ファツキュウ・・・」

シディアスの言葉をさえぎって男はそう言った。

ヴァン・ダーク・ベイダー・・・DEATH STARの軍事を  
任せ、シディアスの信頼をもっとも強く受ける男だった。

「何が平和条約だBOY？誰もそんなものはのぞんでおらん！」

「気でも違ったのか？」

「気が違っているのはあなたの方だシディアス王。」

そのやり取りに各星の代表たちはざわめいた。

「われわれをたばかったのか！？」

「これは星間条約に反する重大事ですぞ！！」

獅子のような獣の顔を持つ男たちが怒声をあげた。

「黙れ。」

ベイダーの声と同時にその男たちが苦しみ始めた。

「PSYCHO BONDAGE（精神拘束）！？よしんだ！ベイ  
ダー卿！」

シディアスの声にベイダーは拘束をやめた。

「全員を会場に閉じ込めておけ。」

会場内から100人あまりの白い宇宙服のようなスーツをまとった  
兵士が現れ、首脳陣を拘束した。

DEATH STARは一人の男によって再び死神の星へと変貌し  
たのだった・・・

？・

厨房ではケーシーを含めた10名のコックがの食器を洗浄と厨房の  
清掃をしているところだった。

そこへ全身を白に包まれたベイダーの兵士「ストームトルーパー」  
が入ってきた。

ストームトルーパーは厨房に入るなりレーザーガンを乱射し、コッ  
クたちを惨殺した。

生き残ったのは殺気を感じ弾道を見切ったケーシーとたまたま転ん

でレーザーにあたらなかったボブだけだった。

銃撃がやんだ瞬間ケーシーは片手なべを空中に放り投げた。

そして、スチームトルーパーが片手なべに氣をとられた瞬間一気に接近、背後に回りこみ、フルフェイスヘルメットに包まれた頭のとてつぺんとあごの部分に手を当て、思い切りひねった。

グリュツといやな音がし、スチームトルーパーの首はあらぬ方向へとまがった。

コックの惨殺が終わってからものの5秒ほどの早業だった。

「な、なんなんだよ！みんな・・・死にしまったのか！？」

起き上がるとボブはそう言った。

「なんだか大変なことになってるみたいだな・・・ボブ、ちょっとこれ着てみてきてくれないか？」

スチームトルーパーの死体から装備を剥ぎ取りながらケーシーが言った。

「はあっ？何言って・・・って、こいつ、あんたがやったのか？」

「ああ、皿洗いなんかしてなきやみんな助けられたんだがな。」

ケーシーは胸の辺りで十字を切る。

「ところで、見てきてくれるのか？くれないのか？」

「いやに決まってるだろ！そんなこと！」

「では、ここで死ぬか？」

「えっ？」

「いいか、あと何分かすればこいつが戻らないことを不審がって仲間が来る。」

俺は身を守るすべを知っているがおまえは知らないだろ？

2、3人なら俺一人で何とかなるが、大勢こられたらおまえまで守りきる自身は無い。

そんな時、こいつを着てれば安全だ・・・仲間だと思われるし、それにしてみる。」

ケーシーはコックの死体を指差す。

「血がほとんど出てないだろ？レーザーガンってのは撃ち殺す道具

じゃない。

電気ショックでダメージを与える道具だ・・・電気ならかすただけで人体に流れ心臓を止められるからな。

誰にでも安定した攻撃ができるようにそうなってる・・・ゆとり仕様ってヤツだ。」

「だから？」

ボブがいぶかしげな顔で問いかける。

「このホワイトスーツは電流を拡散しある程度のレーザー攻撃なら無効化できる。

つまりだ、こいつを着てればどさくさで逃げる事だってできるってことだ。」

ケーシーはボブの肩をポンと叩く。

「って事だ、よし、早くスーツを着ろ。」

「わ、わかったよ・・・」

ボブは納得していない表情で答えたが、確かに着ているほうが安全であることは確実のようであった。

「で、何を見てくるんだ？」

スーツを着ながらボブが聞いた。

「そうだな、まずは一番最初に出会ったヤツに声をかけ、警備室がどこにあるか聞いてくれ。

二人で脱出するには監視カメラが邪魔だからな。

それで聞きながらでも聞き終わってからでもいいから、ここへ連れてくるんだ。」

「声をかけるのか！？ばれたらどうする！？」

「大丈夫、ばれやしない。こいつらはシロートだからな。」

何故、とボブが聞く前にケーシーは答える。

「こいつ、一人で入ってきただろう？プロは必ず二人以上で行動する、何があるかわからんからな。

それに動きがまるでなっていない。戦闘のプロがたかがコックを殺すのに銃なんか乱射するわけが無い。

大丈夫、ばれやしない。もしばれても厨房につれて来れば俺が何とかする。

とりあえず作戦は以上だ、頼んだぞ。」

承諾を得る前にケーシーはボブを廊下へ突き出した。

「無茶苦茶だよ………」

泣き出しそうなのを我慢してボブは歩き出す。

数メートル進んだ廊下の角にストームトルーパーがいた。

ボブは覚悟をきめた。

「あゝすまないが……警備室はどこだったっけ？」

「ん？この階段を下りて左へまっすぐ行った突き当りの部屋だが？」

ストームトルーパーはあっさりと答えた。

「そうか、悪いな……。あ、それと、ちよつと厨房まで来てくれないか？」

実は、コックを始末したんだが、まだ隠れてる奴がいるかもしれん。探すのを手伝ってくれ。」

「ああ、首脳陣どもへの脅しの道具か……。わかった。」

作戦はあまりにもうまくいきすぎだった。

厨房につれてこられるなり首をへし折られスーツを奪われたその死体はケーシーの服を着せられた。

「ホントにちよいいな。」

ボブは得意げにそういった。

「ほかに得た情報は？」

「ん……。そういえば、首脳陣がどうのつて言ってたなあ。」

マスクの奥のケーシーの眉間に深い皺がよる。

「人質……。調印式が罷だった……。それともクーデターか？」

人質も救出しなければいけない……。ケーシーの考えを察してかボブが言った。

「おいおい、馬鹿なこと考えるなよ……。とりあえず逃げることだけ考えようぜ。」

そのためにも、まずは警備室、だろ？」

ケーシーは軽くうなずくと歩き始めた。

五分とかからずに二人は警備室へたどり着いた。

途中で何人ものストームトルーパーとすれ違ったが、怪しまれることは無かった。

素人以下だとケーシーは思った。

奪ったセキュリティカードを使い、警備室のロックを解除した。プシューという音が鳴り、扉が四方に開かれる。

と、突然頓狂な声があがる。

「ひいひいええええ、こ、殺さないで！」

声の主は全身金色に輝く骨格模型のようなロボットだった。

その傍らにはセンスの良いダストシュートのようなロボットがちょこんと待機している。

「みわさんのなかまか？」

ケーシーがつぶやいた。

「みわさん？ そのような方は知りませんが、あなた方はベイダーの・・・あ、いや、ベイダー様の手下ではないのですか？」

「ベイダー・・・DEATH STARの軍事参謀だな。いや、違うが。」

ケーシーが答えた。

「そうですか、では、あなた方にお願いがあります！」

そのロボットはひどく回りくどい言い方で自己紹介（C-3とR-2といった）とそのお願いを話し始めた。

「つまり、だ・・・」

ややうんざりしたような面持ちでケーシーが言う

「ベイダーの娘のレイアがDEATH STARの機密データを盗み出し、そのことに気づいたベイダーは自らの手でレイアを監禁した。

で、盗んだデータはこのR-2に隠してあるので、レイアを助け出した上でこのデータを地球、人工惑星同盟軍に閲覧させてほしい、

と。」

「ええ、まさにその通りです。な、R - 2。」

ピロピロピロ

「どうかお願いしますとっています。」

「じ、冗談じゃない！俺たちは・・・」

「で、その機密データってのはなんだ？」

ボブの言葉をさえぎってケーシーがたずねた。

「DEATH STARの構造上の欠陥データです。」

ピロピロリロ

「そうだな、レイア様はそうおっしゃっていた・・・あ、この星は存在してはいけない、そう言ったのです。」

「おいおい、まさかOKするんじゃないよな・・・」

「ボブ、お前は先に宇宙船まで行って待機していてくれ。」

ボブは深くため息をついた。

「30分だ、30分しても俺が来なかったらお前だけで逃げる。」

「逃げろって・・・宇宙船の船長が殺されてたら？俺、操縦できないぞ？」

「それは運だな。まあ、そうなったら俺がこの星自体をジャックするまで待つてるんだな。」

人質救出を考えなければそれも可能だ、ケーシーは本気でそう考えた。

「あんた、なんにもんだよ・・・」

「では、監視カメラの細工は私とR - 2にお任せを。」

大丈夫、30分程度ならごまかして見せます。

R - 2専用通信機をお渡しします、問題があればこれで連絡します。

「

軽くうなずき、ケーシーは歩き出した。

その背中にはすでに白い兵士たちの確実なる死が刻まれているようだった。

「あいつこそがDEATH STARだぜ・・・」

恐怖と憧れの念をこめてボブが呟いた。

？．

ストームトルーパーに扮したケーシーはレイアの救出を優先した。というより、C-3が通信でうるさくせつつくので、そうせざるを得なかった。

「やれやれ・・・100人救出を優先したかったのだがな。」

ボブに約束した以上、100名を超える人質を30分以内に宇宙船まで連れて行かなければいけない。

レイア一人なら時間を過ぎても戦闘機で脱出させられる。

ふうつとため息をつき、ケーシーは走り出した。

レイアの監禁されている部屋は警備室の階から更に一つ降りた地下フロアの奥にあった。

地下フロアは広く戦闘機の部品などが山積みになっていたが、部屋は一つしかなかったのですぐにわかった。

「C-3、到着した。ロックはどうなってる？」

「はい、ロックナンバーを入力し、カードキーをスキャンするだけです。」

もともと牢屋じゃありませんから、まあ、そんなもんですね。

あ、なんばーですね、はい。おい、R-2・・・わかった。

えーと、2135です、まさかの4桁ですね、まあ、牢屋じゃ・・・

ー

ケーシーは途中で通信を切った。

認証装置にナンバーを入力し、カードキーを通す。

ガチャツと音がし、ロックが解除された。

ケーシーは扉を開け室内に入る。

部屋は畳で言うと5畳ほどの部屋で、机と椅子2台が設置されているだけで、レイアはいないようであった。

「トイレか？」

奥にユニットバスを見つけ確認するが、やはりレイアは見つからなかった。

「これか・・・」

部屋に戻り天井を見ると、エアダクトのふたがずれているのが見えた。

ケーシーは覗き込んだが、レイアはすいぶん前に抜け出した後のようであった。

「狭すぎて俺には通れんな・・・」

とりあえず通信を開き、C-3に連絡を取る。

「レイアはすでに脱出している、どこに行ったかはわからん。そつちでサーチできるか？」

「ああ、なんてことだ、あなたがもたついているから・・・」

「おい、俺のせいじゃないだろ、とにかく俺は首脳陣の救出に向かう。」

レイアはそつちで探し出してくれ。」

「わかりました、たのむぞR-2。」

ピロロ

「あと20分か・・・やれやれだ。」

ケーシーが部屋を出ると、近くに気配がした。

「20・・・いや、100人は来たか。」

おそらくレイアが監禁されていた部屋に警報装置があったのであるう。

地下室には実に200名のストームトルーパーが集結した。

「ベイダー様は侵入者といっていた、絶対に逃がすな！」

ケーシーはその声を聞き疑問に思った。

『何故レイアが逃げたと思わず侵入者と思ったのだ？』

しかし考えてる時間は無い。

ケーシーは戦闘態勢に入る。

1発目の銃声が聞こえる前にケーシーは10人を一瞬で片付けた。

ストームトルーパーのマスクは極端に視界が悪い。

ケーシーは先ずヘルメットを放り投げ、それに気をとられた先頭の兵士の死角から一気に接近密着し、腹部に掌打を叩き込んだ。ヘルメットのガラス面が内側から鮮血に染まった。

吹き飛ばされた兵士はそのまま密着状態だった後ろの9人を巻き込み、後ろの9人も同じく血を吐き息絶えた。

最初の銃撃はカコーンと音を立てて落下したヘルメットに浴びせられた。

ケーシーは山積みのパーツに身を隠す。

「敵は!？」

「見えません!」

「よし、一斉射撃であぶりだす!」

200名の一斉射撃が始まる。

「こいつら馬鹿なのか?」

ケーシーはつぶやいた。

ストームトルーパーの武器はレーザーガンである。

レーザーガンは対生物用兵器なので、物質を壊すには適さない。

レーザーガンを乱射してあぶりだせるはずが無いのである。

しかし、それが逆にケーシーをあせらせた。

「時間が無いってのに・・・」

ここで少しケーシーの過去に触れると、ケーシーは元特殊部隊の間である。

彼の相手はいつでもプロだった。

シロート相手の戦闘など経験は無いのである。

ケーシーは打って出ることにした。

山積みの戦闘機の部品を思い切り蹴り飛ばす。

四方に飛び散ったパーツは20人の心臓や脳天を貫いた。

その様子に恐怖し動きを止めた数人を回し蹴りで攻撃する。

3つのヘルメットが首ごと吹っ飛んだ。

「ば・・・ばけもんだ!」

せつかく姿を現した無防備（に見える）ケーシーに背を向け、残りの兵士は逃げ出した。

しかし、出口は一つ。

虐殺が始まった。

ケーシーは飛び上がると一人の頭を踏みつけ、へし折った。

そして二歩、三歩とまるで飛び石をわたるように兵士の頭を踏みつける。

踏みつけられた頭は全てがあさつての方向を向いていく。

ケーシーが200人の虐殺を完了するまで3分とかからなかった。

「悪いが時間が無い、シロート相手でも手加減はできん。」

ケーシーはホワイトスーツを脱ぎ捨て走り出した。

「時間もないし面倒だ。」

ケーシーは徹底した現実主義者であった。

最小限の犠牲で最大限の結果を出す。

彼にとつて首脳陣が一人や二人殺されようと関係ない。

「理想と現実が違う」

過去に行つたいくつもの作戦行動でも、人質を全員無事に救出できなかったことは少ない。

「見捨てる覚悟」

それがケーシーの強さの要因の一つでもあった。

胸の辺りで十字を切る。

そして合掌。

ケーシーは全速力で調印式会場へと走る。

彼の通り過ぎた後には純白のスーツを真っ赤に染めた兵士たちの死骸が積み上げられていった。

止まることを知らず猛進するケーシーの姿は、さながら暴走特急のようであった。

？．

調印式会場ではベイダーの演説が行われていた。

その模様は超光速通信により、地球と人工惑星へ生中継されている。  
「われわれは過去の屈辱を忘れない。

われわれの諸君らに望むことは一つ、わがDEATH STAR人民を地球へと移住させ、われわれが地球の主権を握り、全人類の指導者になることである。

諸君らに断る権利は無い、われわれはここに全ての星の首脳陣を人質に取ったからである。

われわれは本気だ。その証をお見せする！」

ベイダーの手にリモコンのようなものが握られている。

「ターゲットは・・・先ほど騒ぎ立てた・・・人工惑星レオ！」

カメラの前に獅子の顔をした二人の新人類が引き出される。

人工惑星レオの首相と秘書である。

「何をする気だ!？」

「まさか・・・メギド!止めるんだベイダー卿!」

シディアスが叫ぶ。

「ファツキユ!」

掛け声と同時にベイダーはリモコンを操作する。

ズズンツと会場がゆれた・・・いや、DEATH STAR全体が揺れた。

次の瞬間、DEATH STARの中心から鋭い光が発せられ、一つの人工惑星が消し飛んだ。

人工惑星レオだった。

DEATH STARの外面に設置されたカメラがその状況を映し出す。

「き・・・さ・・・まああああつっ!」

押さえつけていた兵士を振りほどきレオの首相がベイダーへ襲い掛かる。

「HEY sit BOY!」

ベイダーが先の曲がった潮干狩りに使うフォークのような武器でレ

オの首相の胸をえぐった。

「お・・・う」

うめき声を上げて首相が息絶える。

続いて振り下ろされた光る鞭が秘書の首を飛ばした。

「母星が無くなれば貴様らなどいらんだろ？死体を片付けるBOY  
！」

「YES SIR！」

四人のストームトルーパーが死体を外へ運んだ。

「これより12時間以内に返答が無い場合、一つつつ惑星を破壊する。」

見ての通り、これは脅しではない！」

「なんとということを・・・」

シディアスが唇をかんだ。

「さて・・・レイア、お前が何故ここにいる？」

ベイダーの言葉に小柄なストームトルーパーが硬直した。

「フォースを感じる。お前のフォースをな。地下でおとなしくしていれば良いものを。」

ベイダーがマスクを剥ぎ取ると、赤茶の髪のとけない少女の顔が現れた。

つぶらな瞳がベイダーをにらみつける。

それは威圧感よりも品のよさと愛らしさを相手に与えた。

「さあ、娘よ、ここに来たということは話してくれる気になったのかな？」

「・・・」

「ふん、そういえば、誰かがお前を救出に行ったようだが？」

「えっ？」

「何？知らんのか・・・まあ、誰かは知らんが、おそらく死んだぞ。」

「まさか・・・ケノービ？」

「ケノービ？ビオラン・ケノービが来ているのか！？しかし、フォ

「スは感じない……」

「あつ……」

「……いや、ケノービはフォースを消す修行も積んでいた・  
・奴か、なるほど。」

「ちが……」

レイアの否定の言葉をさえぎる様に一人のストームトルーパーがベイダーに襲い掛かった。

「ケノービ！」

「久しぶりだな、ヴァン。」

ビオラン・ケノービ……元DEATH STAR將軍でかつてのベイダーの戦友である。

ホワイトスーツを脱ぎ捨て、青いビキニパンツ一枚となったケノービの右手にはレーザーサーベルが握られていた。

ストームトルーパーたちの銃口がケノービに向けられる。

と、全ての兵士の銃が暴発し、100人の兵士はことごとく死んだ。

「相変わらずの早業よ……」

「お前も抜け、ベイダー……決着をつけよう。」

「ふん……勝てると思うなよ。」

「ケノービ……」

「レイア様、3分経ったら彼らをつれて部屋を出てください。」

誰かは知りませんが、頼もしい見方が到着します。」

「なんだと？」

「ベイダー……貴様にはわからんか？未熟だな。」

「何が未熟だBOY！どちらが未熟か思い知らせてやる！」

ケノービのレーザーサーベルとベイダーのレーザーウィップがぶつかり火花を散らせた。

何度も切り結び、そのたびに眩しい火花が飛ぶ。

100人の人質とレイアはただ見ていることしかできなかった。

何度切り結んだのであろう、勝負はまったくの互角に見えたが、ベイダーの鞭がレイアへと向けられた。

当てるつもりなど毛頭無かったが、ケノービは反応した。

「BOY！それがお前の甘さだ！」

レーザーウィップがケノービの左肩を深く薙いだ。

焼けた血と肉の嫌な臭いが広がる。

「最悪・・・」

せめて名も知らぬ援軍が到着するまでもたせたかった。

「さらば・・・！？」

止めをさそうとしたベイダーの動きが止まった。

黒髪を後ろに束ねた見知らぬ中年がいきなり扉をぶち破って入ってきたのだ。

ケーシーだった。

「きさまは・・・コックか？」

「あんた・・・ベイダー軍事参謀だな。」

二人がにらみ合う。

と、ケノービがベイダーにつかみかかった。

「誰かは知らんが頼む！レイア様と皆を連れて早く逃げてくれ！」

「レイア？・・・あんたがレイアか。」

「ケノービ！あなたも一緒に！」

レイアが叫んだ。

「私はベイダーを倒してから行きます！」

「ダメです、あなたも！」

「さ、そういうことだお譲ちゃん。奴の気持ちをわかってやれ・・・

さあ、みんなも俺について来い！」

わめきたてるレイアを肩に抱え走り出すケーシー。

それに人質たちが続く。

「くっ・・・はなせ死にぞこないが！」

ベイダーはケノービを振りほどこうとするが命を懸けたケノービの拘束は緩まない。

「ケノービ！！！！！」

レイアの叫びが聞こえた。

「レイア様……グ……う……」

ベイダーがサイコボンデージを使い、拘束の緩んだところでケノービの胸にレーザーフォークを突き刺した。

ケノービの死を確認するとベイダーは急いでケーシーたちの後を追おうとした。

しかし、廊下には死体や崩れた壁や扉でバリケードが作られていた。「おのれ……あのコツクめ……」

ベイダーはストームトルーパーたちに通信をしようとした。

しかし、通信系等はすでにR-2にハッキングされ、使い物にならなくなっていた。

「ふわあああきゅううううううっつ！」

ベイダーの怒りの叫びがこだました。

ケーシーは人質を誘導しながらC-3とR-2を回収した。

そこでレイアはようやく落ち着きを取り戻した。

「兵がいなくてですね。」

ケーシーの脱出経路にはストームトルーパーがいなかった。

地下から会場に行く途中で皆殺しにしたのである。

死体はバリケードとして使った。

だから死体すらない。

「何もこんなに殺さなくても……」

レイアはそういったが、ケーシーは

「こうしなきゃこつちが皆殺しだった。」と答えた。

「ところで、メギドってのは連続で撃てるのか？」

ケーシーは聞いた。

もし撃てるとしたら、人質を助けたところで無意味である。

戻ってベイダーを殺さねばならない。

それはあまりにもリスクだった。

「いいえ、一発ごとに最低でも12時間の充電が必要です。」

父の……ベイダーの言った12時間とは、そういう理由からです。

「  
ケーシーは少し安心した。」

宇宙船ではボブと船長が待っていた。

見張りの兵士も数人いたが、船長に倒されていた。

「すげえ！早え！しかもみんな無事じゃないか！」

「いや、二人・・・三人犠牲者が出た。コックを入れるともっとだ。それと惑星がまるまる一つ・・・」

「そうか・・・でも、これだけ助けたんだ！あんた最高だよ！」

「そんなことより、さっさと脱出するぜ！」

全員を登場させたのを確認し、船長が叫んだ。

飛んでいく宇宙船を数台の戦闘機が追ったが、超光速航行に入った船を追いかけることはできなかった。

ケーシーたちを乗せた宇宙船は地球人工惑星同盟軍の駐屯する人工惑星に向かった。

「12時間か・・・3時間は眠れるな・・・」

ケーシーは仮眠室で眠りについた。

？・

夢を見ていたのか、それとも現実だったのか。

夢にしてはあまりにも生々しく、現実にしてはあまりにも理解不能。目を覚ましたケーシーはコロシウムのような場所にいた。

円形のグラウンドに緑の芝が生い茂っている。

ぐるりと取り囲む白い壁の上からは客席となっており、無数の椅子が設置されている。

しかし、入口も出口も無い。

天井からここがどこかのドームであることは理解できた。

『実に興味深い・・・』

どこからか声が聞こえた。

ケーシーは周囲に意識を集中し身構える。

すると目の前に眩しい光が広がり、その中から男（と形容して差し支えないだろう）が現れた。

男は赤に黒の縦ラインが並んだ顔に緑の大きな複眼を付けたようなマスクをかぶり、同じく赤と黒を基調とし、上半身に大きな十字架をあしらったデザインのボディースーツを着ていた。

腰には何かの装置のようなバツクルのベルトが巻いてある。

「デススター兵か？」

「まさか・・・私は・・・君たちの言う神だ。」

「・・・・・・・・」

「BIG SHOCKERという名は知っているか？もう伝説にすら語られなくなったから知らないか。」

私はBIG SHOCKER大首領。時空を紡ぎ世界を延命する・

・救世主だ。」

「宗教家か？」

「ふ、突拍子もない話だったか・・・しかし、お前も感じたことがあるはずだ・・・違和感を。」

今の自分のほかに、もっと違う時を生きる自分がいる、そう感じたことは無いか？」

「カウンセリングか・・・興味深いな。」

「お前は可能性だ・・・時空の融合からはずれし者、イレギュラー、進化の可能性。」

単刀直入に言おう、お前の力をもらう。その尋常ではない戦闘能力を。」

神と名乗った男、大首領はどこから取り出したトランプほどの大きさのカードをベルトの装置へと挿入した。

「RIDE ON! R i R i R i R YUKI!」

ベルトの装置が音声を発すると大首領の姿が変化した。

真紅の騎士を髣髴させる姿。

左腕には龍の顔を模した小手、背後には同じく真紅の巨大な龍が漂

っている。

「ドラゴンだと!？」

あまり表情に変化の無いケーシーの顔に驚愕の色がありありと浮かんだ。

「まずは剣からだ。」

先ほどとはデザインの変わったベルトからカードを取り出すと、小手に挿入する。

「SWORD VENT！」

ベルトの音声に答えるように、空中から片手剣が現れ大首領の右手に握られた。

「HA！」

掛け声とともに大首領が突進する。

「ふっ！」

ケーシーは呼吸を整え、中国拳法のような構えをとる。

最初の横なぎをのけぞって交わしつつ足払いを繰り返す。

大首領はそれを低くジャンプし難く交わす。

着地と同時に連撃、ケーシーはそれを紙一重で交わしていく。

そして、喉元をねらい繰り返されたつきを体をひねりながらかわし、そのまま腕をとる。

「ぐうっ」

低くうめき大首領が地面に組み伏せられる。

「STRIKE VENT！」

腕をへし折ろうとしたケーシーの顔面を火球が襲った。

「ぐうっ」

とつさに飛びのき火球をかわす。

頬に火傷のあとが残る。

「次は銃だ。」

いつの間にか腕に装着された龍の顔のような小手から火球が発射される。

着弾。

ケーシーの体が炎上する。

「ん？期待はずれ……のはずはないか！」

炎上していたのは上着だけで、大首領の顔面にいつの間にかケーシーの拳がめり込んでいた。

「ADVENT！」

吹っ飛ぶ大首領を追いかけてよとしたケーシーに真紅の龍が突進した。

「ぐおっ！」

そのまま壁に叩きつけられる。

「これに耐えられれば合格だ。」

大首領がカードを小手に挿入する。

「FINAL VENT！」

伸身宙返りをしながら跳びあがるとキックのポーズをとる。

その背中をドラゴンが火球で吹き飛ばす。

「DRAGON RIDER KICK！」

炎に包まれた大首領が壁際のケーシーを襲う。

避け切れない、と判断したケーシーは高速落下してくるかかたとソバットを合わせた。

ドゴン！

とすさまじい爆音が響き大地が揺れた。

「くっ……予想以上だ……」

右足を失った大首領が立っていた。

姿は元の姿に戻っている。

「ククッ……まさか……無傷とはな。」

多少の火傷はあるものの、ケーシーはほとんど無傷だった。

しかしケーシーは相手の足から血が一滴も流れていないことに注目した。

「義足なのか？」

大首領が苦笑する。

「ふはっ、これだけの目にあいながらまだ現実味を求めるか？だが・

「……」

大首領に近づくケーシーに真っ白のカードが向けられる。

「！！」

ほんの一瞬気を失った気がした。

そして気づくと大首領のカードに自分の顔が浮かんでいた。

「SEAGAL・・・セガール・・・それがお前の名か。」

聞いたことが無い名前だった。

しかし、どこか懐かしく、誇り高く思える名前。

「さて、お前の力も手に入れたことだし・・・お前にもう用は無い。神の一部になれたことを誇りに思い・・・死んでゆけ！」

「RIDE ON! SeSeSe・・・SEAGAL!!」

バックルにそのカードを挿入した大首領の姿が変化する。

失った片足も変身するとともに戻っていた。

「!？」

ケーシーが驚いたのは足が生えた事にはない。

その姿はまるで・・・

「俺・・・か？」

「ククク・・・お前の力、お前の体で試させてもらっぞ！」

大首領が突進する。

ケーシーは身構える。

と、大首領の体に異変がおこった。

「ザザザ・・・な・・・なんザザ・・・だ・・・とザザ・・・？」

まるでノイズがかかったように歪みだす大首領。

ボンッ

と音がした。

大首領のベルトがはずれ、変身が解ける。

その姿は光沢を放つ骸骨のようであった。

「ま・・・まさか・・・DECADE DRIVERで再現不能ま  
では・・・」

ケーシーはただ成り行きを見つめる。

「ふ、ふはははははっ！ 何という、何という男だ！」

まさか神器を越えるほどの力を有しているとはな！！

よからう、その命しばらく預けておこう！DECADRIVERをより完全なものにするまでな！

セガール……これからはそう名乗るが良い！その名がお前を更なる高みへと導くだろう。

そしてお前がお前の限界を超えたとき、私という神を超越した存在の糧となるのだ！

さらばだ！ふ、  
ふははははははははっ！！」

高笑いとともに大首領は消えた。

その瞬間、世界は虹色に包まれた。

「はっ！」

周囲を見渡すと、そこは仮眠室だった。

時計は二時間進んでいた。

鏡を見ると頬に火傷のあと。

「ただの夢……というわけでもないか。」

そこへ息を切らしたボブが入ってきた。

「はあ、はあ……いないからどこかと思つたら……着いたぜ、同盟軍軍事拠点に……って、ほつぺた、どうしたんだ、ケーシー

?

「セガールだ。」

「はあ？」

「ステイブ・セガール、俺の本当の名だ。」

セガールの言葉に訝しげな表情をしたボブだったが、勝手に納得したようにうなずいた。

なぜか誇らしげな表情だった。

?

宇宙船を降りたセガールをセガールよりも10歳ほど年上かと見える軍人が出迎えた。

「ハートマン教官？」

「はは、ライバック、久しぶりだな。退役したときいていたが軍に戻ったのか？」

「いえ、コックとしてデススターに派遣されていたのですが、成り行きで……」

「成り行きで人質となった100人あまりを救出し、シディアスのクソつたれや××女のレイアを捕虜にし、デススターの精子色のゴム臭い甘つたれた虫けらどもを1000匹以上叩き潰したってわけか！相変わらずだなライバック！貴様の功績は勲章で甲冑をつくっても足りるものではない！」

「捕虜……になるのですか。彼女は脱出に協力してくれました。」  
満面の笑みを浮かべていたハートマンの顔が一瞬こわばった。

「まあ、詳しい話は基地で聞こう……といっても三角屋根の宮殿だな。」

セガールとハートマンがテントへ向かった頃、連合軍はシディアスの演説をきいていた。

シディアス以外の人工惑星の首脳陣はそれぞれの惑星へ戻る手続きをとっている。

「わがデススター軍参謀ベイダーの蛮行は誠に遺憾に思っております。」

しかし、全ての責任はこの私にあります。勝手を承知で連合軍の皆様をお願い申し上げます。

デススターの民を助けてやってください。」

連合軍人からの罵声が飛ぶ。

「酷い野次だな……当然といえば当然だが……」

優男風の金髪の青年将校がつぶやいた。

「あれ……ほんとにルーク様だ！」

「ピロロ・・・ピロ・・・」

ルークと呼ばれたその将校は思わず声をあげた。

「わあ！C - 3とR - 2じゃないか！ひさしぶりだなあ！何年ぶりだ？」

「ええ、私どもが闇市に売られて以来です・・・」

「いや、そんな話はいいや。とにかく久しぶりだ・・・で、デススター攻略の糸口は見つけられたか？」

「ピロロロロ！」

「もちろんです、と言っております。しかしながら、レイア様のお許しが無いままではいかにルーク様といえどお教えできませんと・・・こいつが。」

「そうか、相変わらず頑固だな、R - 2は・・・よし、じゃあそのレイアって人の・・・レイア・・・？」

レイアという名前を聞き、ルークは押し黙った。

「いかがしました、ルーク様？」

「レイ・・・おかしい・・・何が・・・あ、いや、なんでもな・・・！？」

突然兵士建ちの怒号が聞こえた。

ルークが振り返ると、シディアスがいた辺りから黒煙が上がっている。

「フォース！！」

ルークが叫んだ。

「シディアスが死んだ・・・ベイダーのフォースがこれほど強力だなんて・・・急ごう、レイアのところへ！」

ハートマンは拘束したレイアとセガールを伴って会議用テントに来ていた。

「この病気の星の白豚め・・・さつきから黙り込んだままときた！」

「教官、落ち着いてください。さつきも言いましたが、そのR - 2とかいうロボットが来ればきっと教えてくれます。」

「そうかもしれないが時間がない。ひん剥いてケツ堀あげて吐かせたほうが早いんじゃないか？」

ひん剥いて履かせるか！ハッ！面白いじゃないか！」

セガールは無言で微笑んだ。

「失礼します、ルーク突撃隊長、入ります。」

「ルーク隊長か、いいぞ、入れ。」

「はっ・・・！？」

テントを開き、レイアと目があつたルークは胸が熱くなるのを感じた。

「兄さん・・・」

「レ・・・イア・・・！」

突然のことにハートマンもセガールもあつけにとられた。抱擁と口付けの後、ルークたちは我にかえる。

「なぜ・・・兄さんなど？」

「レイア・・・知っているはずがない・・・はっ！し、失礼しました！」

ルークは敬礼をしてハートマンに詫びた。

「いや、かまわん。何ならここで『始めて』もらってもかまわんよ。」

「教官、それより・・・この坊や、R-2をつれてきたようです。」

「ほっ！？ははは、そうか。では、あのくそいまいましい淫売星の落とし方を教えてもらおうか！」

「わかりました・・・R-2」

「ピロピロピロ・・・」

R-2から発せられた青白い光がデススターの見取り図を立体映像として映し出した。

？・

R-2とレイアが伝えたデススターの弱点はあまりにも以外だった。

まず、デススターの中心部にはデススター自体を木っ端微塵にする自爆装置があること。

「デススターの人工はあの日依頼減り続け、今では3000人程度です。あなたが1000人ほど殺害しましたが・・・  
滅亡の日には少しでも多くの人間を誘い込み、巻き添えにする気なんでしょう。」

レイアの言葉に少しは納得したが、二つ目の秘密はあまりにも不可解だった。

その自爆装置はデススター表面から排気口を通して何の障壁もなく一直線に続いた先にあるというのだ。

それが本当ならあまりにもマヌケである。

「巨大なデススターからそこを探すのは至難の業ですが、R-2がナビしてくれます。」

さらに自爆装置は、小型ミサイル一発分の熱量を与えてやれば、スITCHなしでも作動するらしい。

「間抜けすぎるが、デススターを木っ端微塵にするほどの爆発だろ・・・言うほど簡単には行きそうにないな、離脱を考えると。」

「わが隊に死を恐れるものはおらん！いざとなれば・・・」

「いや、教官の隊の連中にこんな繊細な任務をやらせるのは酷でしょう。」

「ん？たしかにそうかもな。」

「僕が行きます！」

ルークが叫んだ。

「坊やか・・・いいだろう、腕は確かなんだろうな？」

見ず知らずの男に何度も坊やと言われ不快ではあったが、ルークはセガールのただならぬ雰囲気には圧倒されていた。

「ええ、もちろんです。でなきゃ突撃隊長なんてやってません。」

「よし、わかった。いいですね、教官。」

「ああ、お前の判断に間違いがあるはずもない。わが隊は彼の護衛に回そう。」

「私も・・・」

レイアの言葉をセガールが遮った。

「君はここにいるんだ。ベイダーの不思議な力はきつと君を感知する。親子だからな。」

だから君はここにいるんだ。」

「・・・では、約束して、必ず帰ってくると・・・」

そういうとレイアはセガールに接吻をした。

「ああ、必ず。」

それから一時間後、デススター攻略部隊およそ150名は、ワープ航行搭載宇宙空母に搭乗していた。

ルークとセガールは戦闘機のコックピットにいた。

ルークにはR-2、セガールにはC-3がそれぞれナビゲーターとして同乗している。

「いいか、くそつたれども！甘つたれの隊長坊やを守るのが貴様らの任務だ！

死を恐れるな！死んでも守れ！そしてこれだけは言っておく！

『殺せば死なん！』だ！忘れるな！思う存分ぶつ殺して来い！」

ハートマンが通信機で100機の戦闘機のパイロットに激励を送る。

「サー、イエッサー！」

「ふざけんな！玉抜かれたかつつ！？」

「サー！イエッサー！！！！！」

ナビゲーターがシグナルオールグリーンを告げる。

「発進したら即ワープ航行に入る。そしたら一瞬でデススターだ！各員スタンバっておけ！」

ちやっかり艦長気取りの船長が言った。

「んじゃあ・・・発進！」

？・

ワープ航行を終えるとすでに戦闘空域だった。

デススターの戦闘機が数百機出撃している。

連合軍の戦闘機は発進する前に撃墜されるものもあった。

「思ったより反撃が手ごわいな・・・」

ストームトルーパーのあまりの弱さに油断していたのか、セガールはつぶやいた。

「彼らも必死ということでしょう、なんせ、あなたに人工の30%を殺されてますから・・・」

「一言多いんだよ。」

しかし、ハートマン隊の精鋭はかなり鍛え上げられていた。

発進できたものは次々に敵機を撃墜していく。

「これなら割と早く片付きそうだ。R-2、デススターにはりつくぞ、ナビしてくれ。」

「ピロロロロ・・・」

ルークがハートマン隊の陰に隠れ、隙を見てデススターの表面に張り付いた。

「よし、このまま直進だな！」

その時である・・・

『A R E A T！A R E A T！』

けたたましい警告音が鳴った。

「何っ？R-2！」

追ってきたのか待ち伏せていたのか、後方に戦闘機がいた

「この感じ・・・ベイダーか！？」

「ファッ、キュウ・・・わかるぞ・・・お前のフォース・・・レイアかと思ったが、そうではない、だが似ている！」

「間違いない！R-2！逃げ切れるな！？」

前方スクリーンにR-2のメッセージが映し出される。

『NO！NO！』

「戦うしかないって！？ちいっ！」

ルークの戦闘機が旋回すると戦闘機の腹部をレーザーがかすめる。

「逃げてても無駄だBOY！」

立て続けに発射されるレーザー、ロックオンされているのか、かなりの正確さでルークの機体を狙い撃ちしている。

「くそっ！フォースの導きでなんとかかわしているが………時間の問題だ！」

『！！！！！！』

「R-2！？ぐあっ！」

レーザーが左翼を直撃した。

雖もみ状態になって飛行するルーク

「さらばBOY！激突して死ね！」

そのとき、いつの間に発射されたのか、誘導ミサイルがベイダーの期待に直撃した。

「やった……けど……デススター攻撃用のミサイルを使ってしまった………」

何とか体制を立て直し、戦線を離脱するルークは悔しさでいっぱいだった。

「あの坊や！ミサイルを使いやがったな！」

ルークを追ってデススター表面にたどり着いたセガールは思わず声を上げた。

その瞬間に通信が入る。

「ライバックさん……デススターの弱点は僕が直撃を受けた場所の増した辺りです、お願いします！何とかして！」

「たたた、大変です！ルーク様が！！」

「大丈夫だって！それより運転を代われ、俺は降りる。」

「！？降りる！？スーツのボンベは30分しかもちませんよ！？」

「十分だ！じゃあな！」

そういうとセガールはハッチを開け、宇宙空間に身を投げ出した。

「ライバックさん！？あわわわわ！」

C-3が頓狂な声を上げていた。

「さてと・・・死ぬかもな。」

セガールがつぶやくと、ミサイルの直撃を受けたベイダー機が落下してきた。

セガールは呼吸を整え、宇宙空間でバランスを取った。

「（大地を感じる・・・足場はなくとも大地を感じるんだ・・・・）」

掌を正面に向け、壁を押しするような姿勢をとり、両手を左右に回し始めるセガール。

「ふつつ！」

次の瞬間、セガールは信じられない離れ業をやったのける。

なんとセガールは、落下してくるベイダー機の巨体を空手で言う回しうけの要領で受け流し、デススター中心部へと続く排気口に叩き落したのだ。

「ふあああああつつつきゅううつうううつつつ！！！！！」

ドカーン！

ベイダーの断末魔と爆発が起こったのは同時だった。

「さて、これで俺は助からんな。」

デススターが爆発すれば自分も巻き込まれる。

セガールに助かるすべは残されていなかった・・・...

数分が経った。

しかし、デススターは一向に爆発の気配を見せない。

「どうせ死んだ命だ・・・」

セガールはそうつぶやくと、排気口の中へ突入した。

どれくらい進んだのだろうか、途中から酸素が現れ、ボンベの酸素を使う必要はなくなった。

それからまもなくして、中心部と思われる広間にたどり着いた。中心には巨大な鉄で作った心臓のような装置が設置されている。おそらくこれが正しくデススターの心臓なのだろう。

周りにはベイダー機の残骸と思われる鉄の塊が散乱している。

「誰だ……」

セガールは気配を感じ言った。

「シュー……コー……」

機械的な呼吸音が聞こえる。

「あんたは……見たことがあるきがする……」

「お前もそう思うか……」

「名は……」

「アナキン……いや、ダースベイダー……」

残骸の陰から、ストームトルーパーをそのまま黒くしたような男が現れた。

セガールは細い目を丸くした。

「あ、あんた……知ってるぞ、有名だ……？しかし、何故知っているんだ？」

「私も知っているよ、ステイブ・セガール……しかし、知っている理由はわからぬ。」

奇妙な沈黙が続いた。

先に沈黙を破ったのはダースベイダーだった。

「この世界は……正しくない……私は自分の存在がわからぬ。」

「同じだ、俺も……ところで……」

セガールは視線で床のラクガキを指した

『フランク参上、終末まであと5分』

「これはどういう意味だ？」

「．．．．．わからぬ。しかし、なぜか五分後には私は．．．いや、世界が終わる気がする。」

違う、世界が終わるとフォースが告げている．．．．．！」

「．．．．．そんな気がするな。どうする？」

「そうだな．．．．．！」

ダースベイダーはいきなりレーザーソードでセガールに斬りかかった。

「くっ！」

セガールは紙一重で斬撃をかわす。

「お前を殺せば世界は救われる．．．そうフォースが告げた。」

「やれやれ．．．こまったもんだ。」

斬り上げを横とびでかわし、戦闘機の残骸で手ごろなものを拾い上げる。

そして顔の前で何かをこねるように両腕を動かし始める。

間合いを見ているのであろう。

「止めにしたほうが身のためだと思わんか？」

「たわけた事を．．．！」

ダースベイダーがレーザーソードを振り下ろす

「そうかい！」

それを突進でかわし、マスクの隙間から手にした残骸を突き刺す。

「ぐっ．．．う」

くぐもった呻き声を発し、ダースベイダーは息絶えた。

「刃物の扱いで負けたことはないんだ．．．．．」

セガールはダースベイダーの亡骸につぶやいた．．．．．

X I .

「さてと．．．．．」

ラクガキにあった5分がそろそろ経つ。

そうなるとうなるのか。

それよりも、落書きを残したのは誰なのか。

「フランク……」

「は俺のことだ……」

突然背後から声がした。

振り向くと、銀色のウサギの被り物をした男が立っていた

「あんたが書いたのか？」

「あんたが生き残った所為でこの世界は終わる……」

質問には答えず、フランクは言った

「どうということだ？」

「教える義理はない……だが、一つだけ……」

そついうとフランクは話し出した

「この世界はいくつもの並行世界が融合してできている……そこには矛盾がたくさんある……時間、空間、人、物、色々ね  
そして更に矛盾しているのがあんたみたいな存在さ……」

「どうということだ？」

「時間切れだ……この世界は終わる。俺はまた別の世界に生まれる。あんたはあんたのまま生きる？死ぬ？とにかく時間切れなんだ……」

フランクの言葉がおわると、突然世界が虹色に歪み始めた……

・

「この感覚……あの時と同じ……!!」

セガールは意識を失った。

セガールが目覚めると、世界は金色だった

「ミワさん……いるんだろ？」

それに答えるように、震える裏声が聞こえた

「またあつたわね……名前を取り戻したあなた……」

「あんたは何者なんだ？」

「それはまだ言えないわ、あなたを見極めてないもの……」  
「見極める？」

「救世主となるか、破壊者となるか……」

「どういう意味だ？」

「まだ早いだよ……次に目覚めたとき、あなたはどこにいるのかしら？何をしているのかしら？」

とにかく、そろそろさよならね……あまり長居すると気づかれてしまっわ……」

「……誰に？」

「BIG SHOCKER……」

「その名は……」

セガールは言い終えることなく再び意識を失った。

目覚めたとき、彼はどこで何をしているのか……

三輪さんの目的は……

フランクの正体は……

戦士の休息

デスターを沈黙させたセガールは暫しの眠りに付く……

TO BE CONTINUED……

## 沈黙のデススター（後書き）

予告・圧倒的強さでデススターを沈黙させたセガールは金色の光の中で眠りに付く。そして目覚めたセガールの目に映ったのは真っ赤なタイツと巨大ロボ！？次回・沈黙の勇者SEAGAL・・・沈黙のレオパルドン「シティーで負けたことはないんだ。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1821m/>

---

沈黙の勇者SEAGAL

2011年10月7日12時37分発行